「時をよく用いなさい」　　２０２６年２月１日　主日礼拝
エフェソの信徒への手紙　第５章１５～１７節

今日からスチュワードシップ月間を迎えます。スチュワードシップとは、先週の礼拝でも学びましたように、管理者としての働きを表す言葉です。神様は私たち人間に、管理者としての役割を与えてくださいました。創世記の初めに天地創造の話が出てきます。神様が天地万物を創造されたとき、神様が作られた世界は神様の目から見ても極めて良い世界でした。神様は、その世界を人間に任せます。「産めよ、増えよ、地に満ちて地を従わせよ。海の魚、空の鳥、地の上を這う生き物をすべて支配せよ」。ここで用いられている「支配」という言葉は、羊を飼う羊飼いのように動物を世話し、面倒を見て養うことです。すべての被造物が平安に暮らすことのできる世界、神様の目にも良いとされた世界を神様から委ねられ、守っていくこと。それが、神様から託された管理者としての働きでした。

神の造り給うた世界に仕え、守っていくことが、管理者・スチュワードの大事な働きでしたが、人間は神様から委ねられたこの世界を、自分たちに与えられたものであると勘違いし、神様のものである世界を好き勝手に蹂躙してきました。富を得るために乱開発をし、自然を破壊し、地球の環境はすっかりおかしくなってしまいました。世界中至るところで戦争は絶えず起こり、人が人を殺し、暴力と殺戮の中で、多くの人々が今も飢えて死んでいく。神の造り給うた美しい世界を守るはずの人間が、美しい地球をこんなふうにしてしまい、今やその人間さえもすっかりおかしくなってしまいました。通りすがりに突然、命を奪われてしまう出来事、幼い子どもたちが親から虐待を受けて殺されてしまう出来事、敬われるべき高齢者たちが施設の中で虐待を受ける出来事。恐ろしい出来事が日常茶飯事になってしまいました。こんなふうになる前に、人類はもっと早く気が付くべきでした。

しかし、まだ遅くはない。神様が造り給うたこの世界を、もう一度、神の目から見ても良いと言われるような世界に戻すために、やらなければならないことがたくさんあります。まず私たちが一番初めに行わなければならないことは、私たちが神様から管理者・スチュワードとして立てられていることをもう一度見直すこと。神様から預かっているこの世界を、神様の思いに従っていかに管理していくのか。そのことを、この２月のスチュワードシップ月間にご一緒に学んでいきたいと思います。

第一週目の今日は、時間のスチュワードシップについて、ご一緒に考えてみたいと思います。時間を管理するということ。これはなかなかむずかしいことです。時間の管理といいますと、忙しく働いている人たちのように、分刻みにスケジュールを組まれていて１分も無駄にしない生き方を思い浮かべるのではないでしょうか。しかし、神にあっての時間の管理者とは、忙しく立ち働く人たちのことではありません。

日本経済新聞がかつて「私たちの暮らしを変えたもの」というアンケートを採りました。するとこんな結果が出ました。第４位はテレビ、第３位はインターネット、第２位が携帯電話、そして第１位はコンビニでした。これらはみんな、早くて便利というキャッチフレーズがよく似合います。ある大手電機メーカーが出した乾燥機付き全自動洗濯機のチラシには、こんなキャッチコピーがありました。「買ったのは私の時間です」。洗濯機が全自動になり、乾燥機が付き、便利になることで時間に余裕ができるようになった。時間を買いました、というわけです。ところがそうやって手に入れた時間を、私たちはいったい何に使っているのでしょうか。ＮＨＫが行った「家族との対話時間」という世論調査によりますと、１０歳から１５歳の子どものいる家族で、親子の対話時間は１日平均でどのくらい

になると思いますでしょうか？　これは１０年前の調査結果ですが、男の子で５分、女の子でも７分という結果だったそうです。またこんな話もあります。ある新聞記者が大阪で経験した出来事です。彼があるお好み焼き屋で食事をしていたところ、そのお店にちょっとオシャレな３０代くらいの母親と小学校５、6年くらいの女の子が入ってきたそうです。ところが、その母親は注文したお好み焼きが来るまでずっと携帯電話でメールを打っていました。その間、娘は一人でぼーっとしていました。そこへようやくお好み焼きが運ばれてきました。すると、母親はお好み焼きを食べながら、なおメールを打ち続け、娘もお好み焼きを食べ終わると自分の携帯電話を取り出してメールを始めました。結局、この親子はお店を出るまで一言も会話をしなかったそうです。いかがでしょうか。私たちはこの話を、ひとごとといって笑い飛ばすことができるでしょうか。

もう一つ時間の話をします。明治学院大学におられた辻信一という教授がいました。彼は、時間には大きく分けて２つの種類があると言います。一つは自然の時間。生き物やこの地球上の営みが長い年月を掛けて築き上げてきた時間。山には山の時間、川には川の時間、海には海の時間があると言います。山に雨が降り、雨は土に染み入って地下水となり、湧き水となり、川となり、海に流れていく。そして水が蒸発して雲を作り、また雨となって地上に降ってくる。個々の生き物にも、鶏には鶏の時間があり、キャベツにはキャベツの時間、ホウレンソウにはホウレンソウの時間がある。人間にも固有の時間があり、一人一人に固有なそれぞれのペースの時間がある。また、子どもの時間、青年の時間、壮年の時間、高齢者の時間、また身体の不自由な人にはその人の時間がある。これらがみんな、自然の時間になるそうです。

もう一つの時間の枠組みとして、経済や産業のタイムフレームがあるそうです。この時間を計るのが時計で、この時間は世界中どこででも同じ質の時間になります。この時間は、時は金なりということで計られる時間になります。同じものを作る作業で、「より早く、より多く、より効率的に、より生産性を上げて」ということが求められてきました。ですから、この経済と産業のタイムフレームは、昔に比べると今は非常に早くなっている。情報はテレビやインターネットで瞬時に受け取ることができ、移動のための交通機関もより早くより便利になってきている。昔はとうてい考えられなかったところへ日帰りで行くこともできるような時代。私たちの暮らしを変えたものは、確かに、コンビニであり、携帯電話であり、インターネットであり、テレビでした。しかし辻先生は言います。「産業や経済のタイムフレームが、しだいに地球や自然、あるいは命のタイムフレームを追い越し、自然のタイムフレームの成り立ちを難しくしている」。効率性や生産性を重視する社会は、鶏やキャベツさえも生産物にしてしまいました。鶏はわずか１畳ほどの広さに２０羽ぐらい詰め込まれて、それが五段ほどに積み重ねられている。そして、太陽が東から昇って西に沈むというゆっくりした時間の中で卵を産むことを待っていられないので、電気仕掛けで人工の昼・夜を作り出し、「早く産め、早く産め」とせかすわけです。こうやって、生き物の時間と空間を切り詰めた結果、何が起こるのか？　その結果、自然や生き物は劣化し、不安定化し、混乱し、そして多くの場合、暴力化するのです。鶏たちは突っつき合い、豚たちはしっぽを噛み合う、そういう共食い現象が起こってくるのです。この問題を解決するためにはどうしたらよいのでしょうか。答えは簡単です。切り詰めた時間を返してあげ、切り詰めた空間を返してあげればよいのです。しかし、加速する経済・産業の時間に生きている人間は、そんなことはけっしてしません。では、どうするのか。鶏が突っつき合わ

ないようにくちばしを縛り、豚がしっぽを噛まないように歯を抜いたりする。そして今、この捕らわれの動物たちに起こっているのと同じことが人間の社会にも起こっている、と警告する環境学者がいます。確かに私たちは、切り詰められた時間、切り詰められた空間に生かされています。その中でだんだんとストレスが溜まり、他人を傷つけ、他人から傷つけられ、しまいには命さえ奪ってしまう。どこまでも広がる大空と大地の中でゆったりとした時間を過ごしていたら決して考えないようなことを、外に出てもビルしか見えない町、狭い部屋の中で忙しく立ち働かされている私たちは、ついついよからぬことを考えてしまうのではないでしょうか。それはまるで、小さな部屋に押し込められて電気の光で何倍もの早さで昼・夜が過ぎていき「早く産め、早く産め」とせかされている鶏のようです。

神様を想うこと。それは、自然の時間に立ち帰ることではないでしょうか。忙しさの中で、仕事の手を休めて、この自然を造り給うた神様に想いを寄せること。祈りとはその神様と会話をすることであり、神様との交わりのために時間を用いることです。礼拝とは、その神様と出会うために、私たちの仕事の手を休めて出かけてくることです。礼拝は安息日に行われます。安息日はもともと、イスラエルでは土曜日でしたが、私たちキリスト教ではイエス・キリストが復活された日曜日の朝に、その復活を記念して行われます。安息とは、休むこと。私たちの手の業を、一旦、止めることです。自分の手の業を止めて、神様の御業に思いを馳せること。それが安息日に行う礼拝なのです。

忙しいという漢字はりっしんべんに亡くなると書きます。りっしんべんは心を現していますから、忙しいとは心が亡くなる、心が死んでしまうことを表しています。心が死んでしまわないうちに、忙しい日常をいったん止めて、手を休めて、造り主である神様に私たちの時間を献げる必要があるのです。そうすることによって、私たちはまた、時間の主でもある神様から豊かな時間をいただくことができる。死んでいた時間がよみがえる。それが、私たちの時間の復活なのです。日曜日、イエス・キリストが復活されたこの記念の日に私たちが礼拝を献げるのは、私たちもその復活に与るためです。そして主の日には、私たちの時間も復活させていただくのです。より早く、より多く、より効率的に、より生産性を上げることを求め続けている現代社会において、私たちが失いかけている私たちの時間を、神様によって復活させていただくのです。

こうして主の日に時間も復活させていただいた私たちは、もう自分の時間を自分のためだけに使うことはできません。効率性・生産性だけを考えた時間の使い方は、我が身と世界とを滅ぼすことになるからです。こうやって私たちの時間を復活させていただいたからには、私たちも時間をもっと有効に使うことを考えてみなければなりません。神様の目から見た時間の有効利用。それは効率や生産性を上げるための時間の使い方ではなく、自分の時間をいかに用いるか。それは、イエス様が教えてくださったように、私たちの時間を他の人たちに仕えるために献げるということではないでしょうか。いかに他の人のために自分の時間を献げることができるか。イエス様がそうなされたように、私たちも自分の時間の用い方をもっと学んでいきたいと願います。

お祈りしましょう。

「愚かな者としてではなく、賢い者として、細かく気を配って歩みなさい。時をよく用いなさい。今は悪い時代なのです。だから、無分別な者とならず、主の御心が何であるかを悟りなさい。」